

令和7年度版

愛顔



え
が
お

感動ものがたり

受賞作品集

愛媛県



銀行を、 人に合うかたちへ 変えていく。

お金に向き合うことは、お金の先にいる人に向き合うこと。
 だからこそ私たちは、デジタルを取り入れ変革を進めています。
 心地よく、使いやすい、人にとってより自然な存在になれるように。
 どこからでも、つながる。手のひらで、お手続きできる。
 将来の計画を、プロとつくれる。悩みを、もっと分かち合える。
 いま、着実にそれらを実現しています。
 私たちはきっと、ずっと、こんな銀行になりたかった。

Better Money,
Better Life.



DHD 特設サイト
はこちら →



伊予銀行

HandyBank NEWS

15歳～25歳若者限定!
口座開設で、1,000円プレゼント!^{*1}

ひめぎんU25口座+

50歳以上限定! ご入会で愛媛の特産品
カタログギフトプレゼント!^{*2}

Prime50

銀行を、もっと近くに
HandyBank

全国28,000台以上で
口座開設や住所変更も!

セブン銀行ATM

ATM+

水樹奈々

※1 口座開設完了の翌月末頃にHandyBank支店普通預金口座へ入金します。次の場合はキャンペーン対象外となります。
・特典入金時点で指定の預金口座を解約されている場合や、当行預金口座に入金制限がある場合

※2 毎年3月末～9月末の継続利用時に条件を満たしていた方に対し、4月・10月の下旬頃にお送りいたします。次の場合はプレゼント対象外となります。
① メールアドレスのご登録がない場合 ② プレゼント時点でご登録いただいたメールアドレスの変更やメール設定等により当行からのメールを受信できない場合

HandyBank 限定 プライム Prime50

Prime50は、HandyBank支店でお取引いただいている、50歳以上の方に向けた特別なサービスです。お客さまのお取引状況に応じて、限定特典をご用意しています。

Point 1

HandyBank支店
普通預金金利
年0.40%
(2025年9月1日時点)

2026年2月9日から!

⇒年0.50%

Point 2

いつでも・何度でも
コンビニATM
利用手数料 0円

月5回まで
ひめぎんアプリ限定
他行宛振込手数料 0円

Prime50
について
詳しくはこちら



Point 3

愛媛の特産品が貰える
22_Ehime
デジタルカタログギフト
年2回プレゼント!

Point 4

プライム Prime50 限定!
お得な定期預金



愛顔^{えがお}とは？

人と人との助け合い、

支え合いの根底にある「愛」と、

困難にくじけることなく挑戦し、

道が開けた時にこぼれる「笑顔」が

結ばれて生まれた言葉。

愛媛県は、

「愛顔^{えがお}あふれる愛媛県」を

目指しています。



知事あいさつ

愛媛県知事 中村 時広

本事業は、愛媛県が提唱する「愛顔」を全国に広く発信し、本県の知名度向上と愛媛ファンの獲得につなげるとともに、「愛顔あふれる愛媛県」の実現に向けた機運醸成を図るために実施しているもので、今回で12回目を迎えます。

今年度は、エピソード部門に44都道府県と1か国から3,634作品、写真部門に46都道府県から4,902作品の応募をいただき、審査委員長である俳優の伊ッセー尾形さん、俳優の神野紗希さん、そして私が最終審査を行ったほか、写真部門については、愛媛県美術会の方々にも御協力を賜りました。また、前年度のエピソード部門の受賞作品を原作としたショートフィルムを募集する映像部門には、12都道府県から28作品の応募をいただき、審査委員を務めていただいたヒメブタの会代表の森幸一郎さん、漫画家の杉作J太郎さん、俳優の片岡礼子さんが最終審査を行い、受賞作品を決定しま

した。

各賞に選ばれました皆さん、誠におめでとうございます。拝見した作品は、どれも「愛顔」と「感動」があふれる力作ぞろい、選考には大変苦労いたしました。中でも、エピソード部門で知事賞に輝いたのは、日本語学校の教え子の努力の結晶である短くなった鉛筆と、小さな種から大切に育てられたレモンの木と一緒にたくましく成長する姿がありありと思い浮かぶ二つのものがたりで、心に深く響きました。

今年度の受賞作品をまとめた本作品集を多くの方々にご覧いただくことで、たくさん「愛顔」が生まれ、その輪が全国に大きく広がることを切に願っております。

終わりに、応募いただきました皆様をはじめ、本事業に御協力を賜りました関係者の皆様に深く感謝を申し上げます。

目次

「エピソード部門」(一般の部)

「知事賞」 鉛筆物語

「特別賞」 女神湖の女神

「優秀賞」 おい！顔を貸せ！

父の部屋の香り

大人、エンエン

「入選」 降車ボタンは笑顔を呼ぶ

一瞬の幸せを刻みながら

息子が負けた記念日

母の終活

ハイブリッド結婚式

「佳作」 ちくわうち

みち子の笑顔のみそ汁

最後の御願い

メッセージ

身も心も暖まる珈琲店

日本代表

電子レンジで、チーン！

サロンの使い方

黄色いスコップの約束

佳き日の暴露

安部 瞳 (大阪府)	8
松田 由喜子 (兵庫府)	10
本田 美徳 (大阪府)	12
原 稔宏 (徳島府)	13
木村 康宏 (愛知府)	14
岡本 千春 (愛媛府)	15
東 知子 (福井府)	16
中村 みなみ (東京都)	17
山本 築 (福岡府)	18
平井 大介 (東京都)	19
植田 郁男 (埼玉府)	20
浅野 政枝 (北海道)	21
竹内 綾 (奈良府)	22
高島 緑 (香川府)	23
小泉 國茂 (大阪府)	24
神谷 優里 (東京都)	25
廣岡 佳子 (奈良府)	26
塩原 恵美 (長野府)	27
李 英圭 (栃木府)	28
浅田 節子 (北海道)	29

「エピソード部門」(高校生以下の部)

「知事賞」 私とレモンの種

「特別賞」 あったかいごはん

「優秀賞」 理想の夫婦

細い線

背中を押すよ

「入選」 父のお弁当

愛の手

オオカミが泣いた日

伯母からのはがき

消えない記憶

藤村 慧依(愛媛県)

南館 千春(愛媛県)

安永 有花(愛媛県)

三浦 喜琉(愛媛県)

弘松 詩菜(愛媛県)

三谷 綺理(愛媛県)

西森 倅哉(愛媛県)

谷 真乃介(愛媛県)

大場 悠月(愛媛県)

田中 美玖(愛媛県)

43 42 41 40 39 38 37 36 34 32

「写真部門」

『一般の部』

「知事賞」 よく頑張った

「河原学園賞」 兄と妹

「優秀賞」 明るい未来

青春

夏です

「入選」 夏、全開!

かまくらだ〜!

ママだあ!

宝物

シャッターチャンス☆

『高校生以下の部』

「知事賞」 夏の思い出

「河原学園賞」 駆け抜ける笑顔

片岡 美和(愛媛県)

服部 将啓(愛知県)

福泉 安(愛媛県)

能瀬 杏音(愛媛県)

山下 朋恵(福岡県)

西尾 透(島根県)

藤川 香那(愛媛県)

土谷 迅斗(愛知県)

浦部 綾(愛媛県)

中川 想(大阪府)

中久保 翔哉(愛媛県)

岡部 桜雅(群馬県)

50 50 49 49 48 48 48 47 47 47 46 46

『一般の部』

「愛媛県商工会議所連合会賞」 いつもありがとう
 「愛媛広告協会賞」 大好きなじいじとおさかなさん

『高校生以下の部』

「愛媛県IT推進協会賞」 三者三様
 「愛媛経済同友会賞」 障がいにも負けずに
 「愛媛県歯科医師会賞」 うちらだんご三姉妹!!!
 「愛媛県獣医師会賞」 柴犬と武将
 「愛媛県情報サービス産業協議会賞」 つくるって楽しい!
 「愛媛県理容生活衛生同業組合賞」 カメラが捉えた、笑みの理由

杉内 佳香 (愛媛県) …………… 51

池田 京平 (愛媛県) …………… 51

石田 彩葉 (愛媛県) …………… 51

横江 景太 (愛媛県) …………… 51

川井 実咲 (神奈川県) …………… 52

岡崎 海空 (愛知県) …………… 52

黒岩 葵 (鹿児島県) …………… 52

木野下 優花 (長崎県) …………… 52

「映像部門」

「グランプリ」 ごはんのケーキ
 「準グランプリ」 専属美容師
 「優秀賞」 いびつな雑巾
 「入選」 カモメ対メダカの午後
 僕は、支えられていたんだ

ありがとう、こころさん

「審査委員特別賞」 カモメとメダカとー

縫い合わせる
 Memories

「カモメ対メダカの午後」

新居浜市立東中学校美術部 …………… 54

鴨頭 圭佑 (愛媛県) …………… 54

伊予ノ画 長澤 颯斗 (埼玉県) …………… 54

つばめ組 本田 真貴 (東京都) …………… 55

ShuIchikawa& …………… 55

Yuichi Sato 市川 周 (福岡県) …………… 55

Nakajima Film Club …………… 55

Daisen Britto (愛媛県) …………… 55

許 文杰 (東京都) …………… 55

佐藤 望 (愛媛県) …………… 55

大分大学文化会放送部 …………… 55

三浦 奈己 (大分県) …………… 55

「エピソード部門」一般の部

「知事賞」

鉛筆物語

安部 瞳（大阪府）

今日もにぎやかな教室で授業が始まる。クラス20人、全てネパールの学生達だ。「昨日、友達を食べました！」と学生。「助詞は『を』ですか？友達『を』ではなく友達…何ですか？」と投げかける私に「と！」「をじゃない！」と、あちらこちらから答えが飛んでくる。「富士山に行ったことはありませんか？」と聞けば「ふじさんって誰ですか？」と返ってくる。つくづく、日本語とは何と難しい言語かと痛感する日々である。

平均月収2万円にも満たないネパールから来た学生にとって、日本で買う鉛筆1本、消しゴム1つも高価なことを知る。と同時に、彼らが捻出してきた莫大な学費に報いるような授業をしなければという思いが募っていった。

そんな中で出会ったNさんという女子学生は、特に心配な学生の一人だった。にぎやかなクラスの中で一番大人しい性格。助詞の使い方や漢字が苦手で、時に彼女が鉛筆を握った手に私が手を添えて文字を練習することもしばしばだった。質問したいことが上手く伝えられず涙目になったこともある。しかし、彼女が家でもコツコツ勉強していることは、日に日に短くなっていく鉛筆を見れば明らかだった。アルバイト先にも恵まれ、時が経つにつれ、会話も驚くほどスムーズになっていった。

そんな彼女が、クラス一番乗りで念願の就職を決めた。彼女が学校を去る日。私に「先生、これをもらってください」と笑顔で握った手を差し出した。開いた指の中から出てきたのは、使い続けて小さく小さくなった、欠片のような鉛筆。私は、その努力の結晶を落とさないよう両手で受け取りながら言った。「助詞の『を』の使い方、100点ですね」。微笑みを湛えたまま、彼女は目に涙を浮かべた。

さあ、今日も日本語にどっぷりつかると180分が始まる。「お守り」をペンケースにしよばせて、間違いを恐れない、あのにぎやかな教室へ向かうとしよう。

「特別賞」

女神湖の女神

松田 由喜子（兵庫県）

姑が亡くなった年の夏、舅を連れて信州へ出かけた。舅は若かりし頃、甲斐駒ヶ岳、八ヶ岳連峰などを踏破した山男である。そんな舅に、どこに行きたいか尋ねたところ、意外にも女神湖の名をあげた。

女神湖は信州蓼科の白樺湖の奥にある一周約四十分ほどの小さな湖だ。奥には立ち枯れの木々もあつて神秘的な風情があつた。遊歩道のあちこちに咲く小さな草花、緑色に輝く水面、遠くに臨む蓼科山。八十歳を越えた舅の歩調に合わせて、私たち夫婦はゆっくりと進む。途中、「疲れた」と言つて舅がベンチで休憩した。その際、財布から一枚の写真を取り出した。セピア色をした白黒写真には、二十代とおぼしき舅と姑が写っている。背後に湖が見えた。

「実はね。ここで妻にプロポーズしたんだ。ここが夫婦のスタート地

点なんだ。」

姑を失って三カ月、ほとんど外出せずに悲しみに暮れていた舅が、子供のような笑顔を見せた。女神湖が舅を笑顔にさせてくれたことに私は大いに慰められた。

帰宅すると、舅は長らく休んでいた散歩を再開させた。その理由が、もう一度女神湖に行きたいからだ。知った私は、散歩に付き添うようになった。

「どうして女神湖でプロポーズしたんですか」

尋ねると、舅は鼻に皺を寄せて笑った。

「何てだったって、あそこは女神だろ」

そうか。舅にとっては姑こそが女神だったのだ。だから女神湖を選んだ。そうして湖は、そこに行くだけで笑顔になれる場所となったのだ。

舅と女神湖に行く機会は、その後も続いた。両親の思い出の詰まった湖は、私たち夫婦にも笑顔を与えてくれた。五回目に出かけたとき、舅の車椅子を夫と交替で押した。その年が最後になると悟っていたのだろう、舅は満面に笑みを浮かべながら、名残を惜しむように湖面を見つめ続けた。

「優秀賞」

おい！顔を貸せ！

本田 美徳（大阪府）

半世紀以上前。広島から大阪に転校したのは小学校五年生の時だ。その初日。私はいきなりクラスメートの男子五人に囲まれて「おい！顔を貸せ！」とリーダーらしい奴にいわれた。転校生への洗礼だ。理由もなく三人がかりで羽交い締めにされた。だが実は私は広島では柔道を習っていた。二人を軽く放り投げるとリーダーが叫んだ。「気をつけろ！こいつ、強いぞっ！」今なら大変な虐めだが当時は笑ってしまう話だ。それがK君との出会いでその後、彼と私はすぐに仲良くなった。

彼の家族は両親と二人のお姉さんで家までよく遊びに行った。賑やかで居心地の良い家庭だった。中学から大学まで更に柔道に熱中した私は警察官になり、彼は子供の頃からの夢だった海上自衛官になった。陸と海とで離れていても手紙でお互いを励まし合った。

歳月が流れ、ともに定年退職を迎えた時、彼は丘に上がった。だがご両親と下のお姉さんは亡くなって独身の彼だけが実家に住んだ。

久々に訪ねて行くと仏間に両親とお姉さんの写真があった。「よく来てくれたなあ。」

笑顔で迎えてくれた彼と昔話をした。帰りに玄関まで見送ってくれた時、ふいに私の眼に涙が溢れた。羨ましいぐらいに賑やかだった彼の家族。もういないのだと思うと：それから彼は浴びるように酒を飲んで泥酔を繰り返す。「寂しいねん：」いつもそう呟いて。

その頃私は再就職先の民間病院で働き出したばかりだったが職員に欠員が生じた。「誰か良い人がいたら採用したい。」採用担当から言われて閃いたのがあの言葉だ。「おい！顔を貸せ！」面食らう彼に履歴書を書かせて職場まで引っぱり張って行って面接試験に漕ぎつけた。その数日後。彼の採用が決まり、二人で笑顔の万歳を叫んだ。今、彼と私は同僚だ。「おい！顔を貸せ！」といった小学校五年生は再び同じ言葉を半世紀以上が経っていわれたのだ。長い歳月が経っても彼と私は固い友情と友愛の愛顔で毎日、忙しく働いている。

「優秀賞」

父の部屋の香り

原 稔宏（徳島県）

六月五日。チーン、とリンが鳴る。

仏壇の前の座布団で正座している母の丸まった背中があった。父の十七回忌。早いものだ。手を解いた母が言った。

「二階に行ってみよう」と。二階は父の部屋である。「でもなあ：」ほくは母の横に座った。二階に行くにはあの階段を上らなければならない。

父は根っからの芸術家であった。刈り上げのオールバックにポマードを塗りたくっていた。油絵の絵の具が染み付いたエプロンからは揮発性油の匂いがする。二つが合わさった空気は強烈で、それが階下まで汚染した。誰も二階には行かず、とりわけ母は嫌った。

母は今年九十。実家には週に数回、一人暮らしの母の様子を見に行っている。父が亡くなってからはあの部屋とはご無沙汰である。

超急勾配の階段の幅はほんの1mほどでぼくでさえ怖い。「わかった。連れて行ったら」母は四つん這いになり一段一段を手で上がる。ほくは後ろから肩でお尻を支えな

がら、母の足首を持って一段ずつ上げていく。突き当たりのドアをドンと開けた。ところがあの香りが消えていた。母がぼつりと「嗅ぎたかったのに：」と悲しそうに。一つ息を吐き、見渡す。四方の壁には父のキャンバスが十枚ほど立て掛けてあった。正面には木炭での下描きの絵があった。これ、なんの絵やる。

なんととはなしに戸棚に目を遣ると、父の日記が立て掛けてあった。手に取ってべらべらと捲っていく。最後は二〇〇八年六月一日。その三日後、父は救急車で運ばれた。一日の日記に目を落とす。『瑞宝双光章受章のときの絵を描き始める』と。はっとしてさっきの絵を見た。キャンバスには二人らしき人物が。これは父と母だ。「母ちゃん」声をかける。背中を向けた母が。えっ。絵の具の蓋を開けてクンクンしているではないか。振り向いた母の鼻先には赤の絵の具が付いている。ぷつと吹き出した。「なに？」と首を傾げるその仕草が可愛くて、ほくは泣きながら笑った。

「優秀賞」

大人、エンエン

木村 康宏（愛知県）

果たせぬ約束がずっと胸に残っていた。

約二十年前、学生の私は飲食店でアルバイトをしていた。同僚で、同い年のSくんとは仲が良かった。彼はフリーターで、料理人を目指していた。いつも笑顔だったSくんは、その裏で店の社員にいじめられていた。

私は運営会社に報告した。その結果、なぜか私が解雇された。悔しくて虚しかったが、ふと気づくと私は笑っていた。

人は悲しみの果てに、笑ってしまうのかもしれない。

Sくんのいつもの笑顔も、きつと同じだったのだと気づいた。

後日、彼と話をした。

「お店の人から聞いたよ。君が動いてくれたって。ありがとう」

私はもう気にしていなかった。クビになって、清々していたくらいだ。Sくんは別の店で修業を始めるという。夢を追う、精悍な顔つきの男になっていた。

「いつか自分の店を持つから、そのときは必ずきてね。美味しい料理を食べさせるから」

私は「うん、約束だ」とこたえた。

それから十年後、Sくんから店を開いたと連絡があった。だが私は遠方に住み、仕事に追われていたので、訪ねることはなかった。

本当は夢を叶えた彼に会うのが、怖かったのかもしれない。胸を張って会える自信がなかった。

さらに時は流れ、Sくんとは疎遠になった。だが忘れたことはなかった。ある日、私用で彼の店の近くへ行く機会があり、思いきって予約を入れた。

店を訪れると、立派な個室に通された。やがて調理白衣をまとったSくんが現れた。

言葉を交わすより先に、私たちは子どものように泣いた。

「お互い、もう四十歳か」と笑い合うつもりだったのに。

そこへ、Sくんの妻と三歳の娘さんが顔を出した。

娘さんがつぶやく。

「おとながエンエンしてる。おかしいね」

その言葉に、私たちはようやくやく笑った。

人は本当に悲しいとき、笑ってしまうことがある。そして本当にうれしいとき、大人でもエンエンしてしまうこともある。

約束の夜に、私はしこたま酔った。

「入選」

降車ボタンは笑顔を呼ぶ

岡本 千春（愛媛県）

その日、私は所用があつて、バスに乗った。

普段なら電車を利用してはいるが、その日はバスならではの乗り心地の良さを楽しみたくてバスを利用した。

久しぶりのバスに窓の外を流れる眺めを楽しんでいた。

次々止まっていく停留所の一つから、五歳ぐらいの男の子とおばあちゃんと思しき二人連れが乗ってきた。

男の子はさっそく靴を脱ぐと、座席に上がり、車窓にかじりつくようにして、外の景色を眺めていた。

バスはスムーズな加速をしながら、進んでいく。

車内に次に止まる停留所のアナウンスが流れる。

そのたびに男の子は

「次？」と聞く。

「まだで」

おばあちゃんは答える。

その繰り返しを何度かしていた。

停留所に止まるたび、数人がバスに乗ってくる。

数十分、経ったところで、次に止まる停留所のアナウンスが流れた、と

「次！」

おばあちゃんが男の子に言った。

「えっ！」とばかりに男の子は降車ボタンを押そうとし

た、が男の子はボタンを押すのに手間取ってしまい、すぐには押せなかった。

すると乗客の誰かが降車ボタンを押した。

車内に降車ボタンが点滅した。

すると男の子は急に泣き出した。

「あらら、押されてしもたがな」

男の子はボタンを押すのを楽しみにしていたのだった。

するとバスの運転手は、

「ボタン、取り消しますので、ボク、もう一度、押して

いいですよ」

運転手は降車ボタンを一度、取り消した。

降車ボタンの点滅が消えた。

「まあ、押さしてやんなさるって、よかつたで、押しない」

点滅の消えた降車ボタンを男の子は今度はしっかりと押した。

車内にもう一度、降車ボタンが点滅した。

あの泣き顔はどこへやら。満足そうな男の子におばあ

ちゃんも笑顔になっていた。

男の子のうれしそうな顔に、私、だけでなく車内にいた

乗客、みんながにんまりとしていた。

「入選」

一瞬の幸せを刻みながら

東 知子（福井県）

最近、夫は私の顔をじーっと見るようになった。私が笑って「どうした？」と聞くと何も言わず、にこおっと笑う。そんなことが多くなった。言葉にはできないけれど、夫にも思うことが、伝えたいことがあるのだろう、そう感じている。

夫は今から8年前、47歳の時に前頭側頭葉変性症と診断された。認知症と同類とされているが、記憶障害より社会性の欠如と人格障害が目立つ難病指定疾患である。半年前、主治医から「コミュニケーションが取れるのもあと一年くらいだと思ってください」と告げられた。今は、ぼーっとしていることも多くなり、言葉も出にくくなっている。オウム返しのように「これ食べる？」と聞くと「食べる」、「もうやめとく？」と聞くと「やめとく」と答える。そこに本人の意思があるのかは分からない。ただこれは、言葉の最後を繰り返す病気の特徴でもある。

そして夫は言葉だけでなく、笑顔も返してくれる。私が笑うと夫も笑ってくれるのだ。もともと、まんまるのお月

様のような顔で、太陽のようににこにこよく笑う人だった。何があっても「大丈夫」と笑っている人だった。そして私はその笑顔が大好きで、それに救われていたのだということを、結婚30年にして知ったのだった。まだ、間に合う。まだ、時間は残されている。夫が私の笑顔に反応できなくなるまで、私は笑いかけ続けようと思っている。もう、言葉では伝えられないたくさんの想いもこれまでの感謝も笑顔に乗せて伝えればいい。そして、夫が最後に記憶するものが私の笑顔であって欲しい、そう願っている。私も夫のたくさんの笑顔の一つでも多く心に刻んでいきたい、そう思っている。

今日も私は夫の好きなものを準備する。80年代の音楽、唐揚げ、オムライス、そして私の笑顔。「おいしい？」「おいしい」そんな何気ない会話をいっぱい笑顔に乗せて。

「入選」

息子が負けた記念日

中村 みなみ（東京都）

私は、息子とオセロや、トランプなどの遊びをするとき、これは『接待』だと思いうようにしていた。息子は、ものすごく負けず嫌いで、今のいままで楽しく遊んでいたはずなのに、負けるとわかると、とたんに悪魔がのりうつったかのように、怒り、大泣きした。「これはゲームだからね」「勝ち負けがあるから、面白いんだよ」「次はどうやったたら勝てるか、考えてごらん」などと言ってみても、大泣きするだけで、まったく聞いていない。毎日毎日これを繰り返すうちに、私は学んだ。この子は、もう少し成長したらきつとわかるはず。今は、『接待』で甘んじようと。恥ずかしながら、私は、息子の負けず嫌いに、負けてしまったのだ。そのため、私と息子が遊ぶと、必ず息子が勝つ。なんなら、「ママは、もう少しこうしたら勝てたんじゃないかな」などと、アドバイスまでしてくるようになった。屈辱的だが、今は成長段階。これは『接待』だ。そう思いながら、日々負け役に徹していた。

そんな時、友人家族が遊びに来て、息子は覚えたての将

棋をやろうと、友人パパを誘った。もちろん息子が日々やっているのは『接待将棋』だ。しかし、そんなことを知らない友人パパは、本気で勝負した。息子は、あっさり負けた。息子のことをよく知る友人が、友人パパをにらみつける。でも、友人パパは何も悪くない。息子は、盤面を見たまま、うなだれ、固まっている。なだめにいくかと思ったとき、手を握りしめ、正座で、ずっとうつぶむいていた息子が、一言、小さい声で、言った。

「まいりました」

とたんに、大きな声で泣き出した息子。私も夫もうれしくて、息子を抱きしめて、泣きながら笑った。

「入選」

母の終活

山本 築（福岡県）

母が終活をはじめたのは、三年前の春のことだった。

その宣言を本人の口から直接聞かされたときには、すぐに母の病気を疑った。が、農家の嫁として太陽のしたで三十年以上汗を流した母の顔は、年相応の皺こそあるもの、いたって元気そうに見えた。

「というわけで、よろしくお願いね」

宣言を終えた母は妙にあらたまって頭を下げると、私に終活の協力を求めた。その日から母と私の二人三脚の終活が始まった。

母の終活のほとんどは旅行に費やされた。父の遺品などを整理した母は、私を伴って国内の観光地に出掛けた。岩国の錦帯橋や奈良の大仏、弘法大師が入定した高野山奥の院など、時間の許すかぎり一緒に足を運んだ。

旅行中のスケジュール管理や宿の手配は私の役目だった。母の希望をもとに移動ルートを設定し、インターネットでホテルの予約を取った。

旅行中の母は楽しそうだった。私は母の喜ぶ姿をはじめて見たような気がした。出来の悪い子どもだった私はいつも母に迷惑を掛けていた。教師の前で頭を下げる母のとなりで、何もできずにその横顔を見つめていた。そのため、

親としてではなく一人の観光客として無防備に楽しむ母の姿を見るのは悪い気がしなかった。母を連れて観光名所を案内しながら、私はすでに母を支える立場にあることを自覚しないわけにはいかなかった。

「でも、なんで急に終活なの？」

旅行の帰り道、あらためてその質問をすると、母は少し考えてから口を開いた。

「お父さんがおらんくなつたやろ」

父は母が終活をはじめる半年前に亡くなっていた。きっと、父の死をきっかけに自分の残りの人生のことを考えはじめたのだろう。その想定内の答えに、私は胸をなでおろした。

「それと」

「それと？」

戸惑う私をよそに、母はいたずらそうな笑顔を見せた。「死ぬ前にあんたに親孝行でもさせてあげようて思ったたい」

「マジか」

母の終活はまだまだ続きそうだ。

「入選」

ハイブリッド結婚式

平井 大介（東京都）

令和4年に入ってすぐ結婚式を挙げた。

コロナ禍で、まん延防止等重点措置の最中だった。

この頃にWEB結婚式が広まり、リモートでの参席が顕著になった。

私と妻は遠距離恋愛で妻は地方から上京したので、妻のご両親には苦渋の決断でリモートでの参席を案内した。

「いいよいいよ、こんな世の中だしね」と快くお返事をいただき、私の親族は現地で参席、妻の親族はリモートでの参加となった。

結婚式当日、挙式をする教会では新郎側は親族や同僚が座り新婦側はディスプレイが設置された。

リモートで新婦の親族を映すためのディスプレイだ。

式が始まる数分前、ディスプレイの画面には次々と新婦の親族が映し出される。

控え室でもその様子が見えるのだが、みんな自宅の居間を背景に正装なため違和感がある。

これもハイブリッドな挙式がゆえの光景なのだろうと思いつつ、新婦のご両親がまだログインしてないとスタッフさんが慌てている。

定刻になれば挙式は始まってしまい、新郎新婦から連絡

をとることはできない。

ご実家に連絡するも誰も出ない。

定刻がきたため、せめて新婦の入場後にはログインしていることを祈り会場へ。

新郎が先に入り、その後に新婦の入場後も画面にご両親はいない。

晴れ舞台を見せられない後ろめたさを抱えたまま神父の前に着いた途端、まるで花嫁を奪いに来たかのように扉が開く。

新婦のご両親の到着だ。

会場は静まり返り画面の向こうにいるはずのご両親がなぜここにいるか聞くと、「いやあ昨日の夜中からネットにつなげようとしたけど映らなくてね。もうわからないから夜中に車で向かったんだよ」

西から東への横断で6時間以上もかかる距離を一晩かけて駆けつけてくれたのだ。

「マスクもしているから感染対策はばっちりだよ。さあ式を挙げておくれ」

マスクの奥の笑顔を見て新郎新婦も参列者も、スタッフさんも安堵と笑顔に包まれた。

「佳作」

ちくわうち

植田 郁男（埼玉県）

娘がまだ5歳だった頃の話です。当時の私は、仕事と人間関係のストレスから、酷い鬱病を患ってしまい、会社を休職、家でもほとんどベッドで横になっていてような生活をしていました。そんな我が家からは、笑顔も笑い声もすっかり姿を消していました。

妻と幼い娘に対する申し訳なさと、自分に対する不甲斐なさに苛まれながら、迎えた節分の日のことです。その日は、少しだけ体調が良く、珍しくリビングのソファで横になっていました。

娘が何か言いたげに私の傍にやってきたかと思うと、ふいに「豆まきがしたい」と言ったのです。普段は私の体調を気遣い、おねだり一つしない娘の、久しぶりの願い事を何とか叶えてやりたいと思ひ、妻に頼んで豆を買ってきてもらい、私は下手くそながら、段ボールに鬼の顔を描き、それをカーテンに貼り付けました。娘が嬉しそうに、豆を撒き始めます。

「おには〜そと〜！」

パラパラと段ボールの鬼に豆が当たります。娘は「当たった、当たった」と大はしゃぎ。そして次の瞬間です。

「ちくわ〜うち〜！」

そう、娘は「福は内」を「竹輪うち（家）」と言っていたのです。当時の娘の大好物だった竹輪。ソーセージを食べるように、一本ムシャムシャおやつ代わりに食べてしまうほどでした。その映像が重なって、私も妻も大爆笑！

娘は「何がそんなに可笑しいの？」とばかりに、私と妻の顔を交互に見つめていましたが、そのうちケタケタと笑い始めました。その顔がまた何とも愛おしくも可笑しくて、私と妻はひとしきり笑いました。

暫く遠のいていた、笑顔と笑い声が我が家に蘇った瞬間でした。それは私の心を優しく包み込み、ふわっと軽くしてくれたのです。家族の愛顔に救われた私の体調は、その日からみるみるうちに快方に向かい、今の私があります。そして、私の心を救ってくれた「ちくわうち」は、あの日から我が家の節分の定番となっています。

「佳作」

みち子の笑顔のみそ汁

浅野 政枝（北海道）

妹のみち子は生まれた時から脳性マヒの障害を負っていた。手は動かせないが足指は器用だった。みち子は20歳で養護学校の高等部を卒業したけれど手では何もできなかった。宛て先のないラブレターをカナのタイプライターを足指で打って、自宅で過ごしていた。

ある日、私は思いつきで、「父さんの建てたアパートで暮らしてみない？」と言った。

26歳の私はそのころ、結婚したばかり。アパートの2階に住んでおり、真下の1部屋が空いていたから呼ばれると直行できた。

早速、私は夫に頼んで妹の部屋の流し台とコンロ台を低くしてもらった。床に盥（たらい）を置いたような形だ。妹は車輪付き事務用椅子に腰かけ足を丁寧に洗い、木製まな板を床に置き、肉や野菜を小さい包丁で切る練習をした。危なっかしいがゆっくりできた。

また夫は鍋の持ち手に針金を渡し、コンロから鍋を両足で持ち上げるように工夫してくれた。妹の動作はスローモーション映像だった。

朝、目覚めると妹は自分でベッドから起き上がったが、着替えはできない。私はHBC（北海道放送）ラジオに放送して頂きボランティアを募った。当時、素人の発言コーナーがあった。その後、北海道新聞も生活面で取り上げても下さり、午前10時頃の1〜2時間の主婦のボランティアは断るほど沢山来て下さった。朝食を作る時間帯は来て下さる人が少なく、妹は時間がかかってもご飯のみそ汁は自分で用意しなければならなかった。

朝、私の夫が出勤すると、私はそーっと1階へ降りてみた。妹は鍋に豆腐と味噌を入れ、まさに今で上がる寸前だった。私は2つのお椀に少量ずつ入れ、それぞれで味見した。

まずお椀を妹の口に当てるとゴクリ。自信に満ち溢れた表情で、明快に、「うん。おいしい！」。大きな黒い瞳はキラリ輝き、満足げに静かに笑った。満面の笑みであった。50年前の笑み。妹の自律生活の真の第一歩であった。介護保険などのない時代の話である。

「佳作」

最後の御願

竹内 綾（奈良県）

「御願いします」

スマホに届いた一通のメール。送り主は、一週間前に亡くなったおばあちゃんだった。メールの受信日は9月25日。亡くなるちよūd一週間前だ。私は、胸の奥がふるえるのを感じながら、その短い言葉を見つめた。

おばあちゃんは、共働きの両親に代わって私を育ててくれた。背筋をすつと伸ばして台所に立つ姿。包丁の音と味噌汁の香り。相撲や箱根駅伝のテレビをつけて、画面の前でする拍手。その光景は、今も目に焼き付いている。

おばあちゃんは、「何か欲しいものはある？」と小学生の私に微笑み、お菓子やアイスを用意した。「いっぱい買っているからね」と部活動に励む中学生の私には、大好物の牛乳や栄養補給ゼリーを山ほど買ってくれた。重い荷物を持つ姿に胸が痛み、高校生になった私は買い物を手伝うようになった。おばあちゃんは「いつも買い出しありがとう」と言いながら、当たり前のように私の好きなお菓子を、買い物リストに入れてくれていた。

そんなおばあちゃんは、私が高校三年生になった春、咽

頭癌を宣告された。家が大好きだったおばあちゃんは、自宅療養で延命措置をとらない選択をした。月が経つにつれて声も、食事も失い、家のベッドで寝たきりになった。そして、骨と皮ばかりの指先で私に最後のメールを打ったのだ。

「御願いします」

それは、牛乳を頼む、たったひとつのお願いだった。いつも私のわがままを優しく聞いてくれたおばあちゃんが、最後の最後に私に頼ってくれた。もう喉を通らないはずの牛乳を私に買ってほしいと頼んだ。

それは、死を目前にしてなお、私の「欲しいもの」を真っ先に想い浮かべてくれた、愛のかたちだった。

いつも私のお願いを叶えてくれたおばあちゃん。私はその優しさに応えられていたのだろうか。

今日も私は仏壇に向かい、牛乳を供える。

「買ってきたよ」

ありがとうを、何度でも伝えたくて。

「佳作」

メッセージ

高島 緑（香川県）

孫の寛太郎がこの春小学校に入学した。娘は一年ほど前からランドセル選びに奔走、秋になって注文したランドセルが届いた。ところが、あれほど入学を楽しみにしていたのに、その頃から彼は、強い不安を覚えるようになった。ひとりで登下校することを怖がり、友だちができるだろうか。ひとりで登下校することを怖がり、友だちができるだろうか。かとひどく心配をする。

おとなしく神経質な彼は、やがて不安のあまりチックを発症するようになった。しきりに強くまばたきをする。それがまた、彼の新しいストレスとなる。親や私たちは、しばらく学校の話には一切触れないようにした。ランドセルは箱に入ったままだ。

三月に入ると、娘は本人から不安に思っていることを聞き出し、ひとつひとつ紙に書き取ると冷蔵庫の扉に貼りつけ、一緒に心配事をやっつけようと提案。早速活動開始だ。毎日一緒に登校練習をしたり、同じ学校に通う子たちと遊ばせたり、あれこれ実践。不安が解消すると「よし！」寛太郎はうれしそうにその項目に大きなマル印をつける。少

しずつだが、自分に自信をつけていった。

そして迎えた入学式前夜。初めて箱からランドセルを取り出した。「わあ！」手に取ってかばんのふたをあけた寛太郎。うれしそうに声をあげたが、すぐに娘の膝に取りすがって大声で泣き始めた。娘が、彼の手に握りしめられている一枚の紙に気がついた。

「きれいでじょうぶにしあがるように、しよくにんがこころをこめてつくりました。おもいきりわらうひもちよっぴりないちゃうひも、ランドセルはずっといっしょ——」

中から出てきたのはかばん屋さんからのメッセージだった。「うれしいね」娘の言葉に寛太郎が泣きながら大きく頷く。送られてきた動画に胸が熱くなった。二期、お気に入りのランドセルを背負い、元氣一杯に通学する寛太郎。もうまばたきはしない。かばん屋さんからの温かなメッセージに、あの日流した涙を、彼は生涯忘れないだろう。

「佳作」

身も心も暖まる珈琲店

小泉 國茂（大阪府）

東日本大震災発生時、私は厚木市にいた。新幹線で大阪に帰る私たち四人は、運転を再開した電車に乗り、夜遅く横浜駅に辿り着いた。中央出口付近に大勢の人が床に新聞紙を敷いて寒そうに座っていた。案の定新幹線も新横浜駅までの地下鉄も不通であった。休める場所を探して閉店で灯りが消えている街をさまよった。夜間営業と書かれたサウナに入ると「客は全員帰ってもらった。」とにべもない。仕方なくさまよっていると、灯りの付いた大きな珈琲店を見つけた。閉店時間を過ぎていたが、若い男の店員に「今からでも入れますか。」と聞くと「お困りでしょう。お入り下さい。」と入れてくれた。連れの三人とは別席になったが席に座ることができた。先ほどの店員さんに「店長さんですか。」と聞くと「僕は学生アルバイトです。店長は今日はおりません。」と答えた。「閉店時間なのに何故店の中に入れて頂けたのですか。店長に相談されたのですか。」と聞くと「店長には相談していません。女子学生のアルバイト三人と相談をして、帰宅できないお客様は残って頂い

て、テラス席の椅子を店の中に入れてより多くの方を受け入れることにしました。」と答えてくれた。何と心暖かい学生達なのだろう。

余震が続き不安な夜が過ぎて行つた。朝の五時頃になると、アルバイト学生が「故障していた珈琲サーバーが一台復旧しました。僅かの量ですが珈琲をお持ちいたします。お金はいりません。お店のサービスです。」と言ってカップに三分の一程度の分量であったが、暖かい珈琲をテーブルに運んでくれた。店内は不安から一気に解放され愛顔で包まれた。

六時前になると「地下鉄が運転を開始しますとのニュースが入りました。」とアナウンスしてくれた。客は一斉に立ち上がり、出口でアルバイト学生にお礼を言うと、学生たちも満面の愛顔で送り出してくれた。

「佳作」

日本代表

神谷 優里（東京都）

パラグライダーの一日体験コースに一人で参加した。その日の参加者は私と中国人の女性の二人だけだった。私と同年代に見えた彼女は大学で日本語を専攻していたという。

「きのうは静岡で富士山見てきました。その前は京都で神社とかお寺を見ってきました。あしたは浅草に行きます。土曜日に中国に帰ります」

ずっと空を飛んでみたいと思っていた。いつかそのうち、時間ができたら、一段落したら、と先延ばしにしてきた。火葬後の祖父の骨を見たとき、やりたいことはすぐやろうと思った。東京から埼玉に来るだけで、ずいぶん時間がかかった。異国の地への一人旅は想像もつかない。

「お一人で日本旅行って怖くないですか？」
私が尋ねると彼女は笑った。

「日本人優しいです。同じ大学だった友だちと十人くらいで初めて日本に遊びに来たとき、日本人は優しくかったです。だから、一人でも大丈夫だと思いました」

「もしかして、今回二回目ですか？」

「日本は二回目です。パラグライダーは初めてです」

初めての日本旅行で彼女が出会った日本人が彼女に優しくかったから、私は今日彼女に出会えた。私の知らない誰かの優しさが彼女をここに連れてきてくれた。

責任重大だ。今日の彼女にとって私は、日本代表なのだ。
「お写真お撮りしましょうか？」

「ありがとうございます」

私は彼女のスマートフォンを預かった。パラグライダーのインストラクターは一人だったので順番を待つ間、パラグライダーに挑戦している彼女を撮ることができた。スマートフォンを縦にしたり横にしたりしてたくさん撮った。彼女の体が浮いた瞬間もしっかり収めた。

彼女は私からスマートフォンを受け取ると、ニコニコしながら次々と写真を確認していった。

「いっぱいありがとうございます。今、中国にいる友だちに写真送りました。あ、返事来ました」

そのお友だちといっしょでも、一人でも、彼女がまた日本に来てくれたらいいなと思った。

「佳作」

電子レンジで、チーン！

廣岡 佳子（奈良県）

「ばあば、これ電子レンジでチーンして！」と、遊びに来た孫が、買ってきたフライドポテトを持ってきた。温めたフライドポテトをおいしそうに食べている孫と娘を見て、思わず、「電子レンジで、チーン！み・な・こ・ちゃーんがチーン！」と、リズムよく口ずさんだ。

「お母さん、今日の晩、何食べるん！」「今日は、冷蔵庫に肉じゃが入れてるから、電子レンジで、チーンして食べるといって。」

『今日の晩、何食べるん！』・・・これは、娘が小学生の頃、仕事に出かける私に、毎朝かけてくる言葉だった。娘は、帰りが遅い私を待ちきれず、先に一人で、電子レンジで温めて夕飯を食べていた。私はといえば、帰ると、ほったらかしの食事の後片付け、次の日の夕食の準備、洗濯を同時進行でこなし、疲れ気味の日々を送っていた。でも、お腹をすかせた娘を思い、「ちゃんと作っておかないと！」と、頑張ってもいた！

そして「電子レンジで、チーン！み・な・こ・ちゃーん

がチーン！」と娘の名前を付け、このフレーズを繰り返しながら料理を作っていた。これが、なんだか口癖のようになって、気付くと歌っている時がよくあった。

「昔ね・・・あんたが小学生の時、よう歌ってたんよ！」

「電子レンジで、チーン！み・な・こ・ちゃーんがチーン！」

「知ってるよ！み・な・こ・ちゃーんをチーン！やる・・・あの頃、わたし、お手伝いもせんとわがままだったから、『みなこを、電子レンジでチンして、まる焦げにするぞ！』って歌ってたんやろ？」と、娘が笑いながら言った。

「そんなこと思ってたんや・・・そうか、そうだったん・・・いやいや・・・あんたがチーンして食べるもん頑張って作るうって、自分を励ますつもりで歌ってたんやけど・・・。」と、思わず、大きな誤解に大笑い。娘も大笑い。孫が横でげらげら笑う。

「電子レンジで、チーン！み・な・こ・ちゃーんがチーン！」

「佳作」

サロンパスの使い方

塩原 恵美（長野県）

今時どこの介護施設も同じかと思うが、うちの施設はお金がない。備品がちよつとくらい壊れようが、修理をして使っている。

ある日のレクリエーションにて。風船バレーをしていると力が入ったアタックが天井照明器具のカバーを破損。幸い、落下や全壊は免れたものの、プラスチックカバーにひびが入った。誰が見ても壊れた状態。一瞬の間を置いて、一緒にゲームを楽しんでいた利用者さんが大声で一言。「サロンパス貼るとき。」重ねて別の利用者さんが「そりやすぐ直るわ。」その二言に、その場にいた全員が大爆笑。職員は「（照明器具に）さ、さ、サロンパスですか？」と答えるのが精一杯。アタックした利用者本人も管理者も申し訳なさそうな顔だったが、一瞬で笑顔を通り越して大爆笑。絶妙なツッコミに、風船バレーをしているときよりも生き生きとした利用者さん、職員の顔は忘れられない。

利用者さんも施設にお金がないことは察している。毎日殺伐とした業務の中で、こんなに大笑いしたのは久しぶり

だった。サロンパス発言をした利用者さんは認知症を患っており、普段冗談を言うこともない真面目な方。本人はいったって真面目に発言をされており、だからそれがウケ狙いでもなく余計におかしくて皆が吹き出した。一瞬で皆を笑顔に出来るこの方の持ち味だと思う。

さすがに利用者さんのサロンパスを使うわけにはいかなので、ガムテープで応急処置がされた。皆が忘れた頃、静かに新品に取り替えられていた。認知症を患っていると今の出来事自体は忘れてしまっても、そのときの感情はいつまでも残ると言われている。今回の出来事はちよつとした事故だったが、楽しい記憶だけが残っていてくれたらそれはそれでよかった。お金がないながら、どこにお金をかけるか。どのタイミングでお金をかけるかは大事だと思う。どうやったらあの輝く表情を引き出せるか、私たち介護スタッフの腕の見せ所だと感じた。

「佳作」

黄色いスコップの約束

李 英圭（栃木県）

「もう○○くんとは、ぜったいに遊ばない！」

幼稚園から帰った甥っ子が、玄関で靴も脱がずに怒鳴った。話を聞くと、お砂場でお気に入りの黄色いスコップを○○くんに貸したところ、返してもらえず、そのまま壊されたらしい。「わざとじゃない」と先生は言っていたようだが、甥っ子の怒りは収まらなかった。

「ぼくの宝物だったのに……」と、声を震わせるその姿に胸が痛んだ。私は彼の手を引いて、買い物ついでに新しいスコップを一緒に選んだ。でも、「こんなじゃない。もう砂場には行かない」と彼はそっぽを向いた。

翌日、園での出来事を先生から電話で聞いた。○○くんは泣きながら謝っていたらしい。「スコップなおそうとしたら、ぼきって折れて……」と。

数日後、私は甥っ子と近くの公園へ行った。何気なくスケッチブックとクレヨンを持っていくと、彼はベンチに座って黙々と絵を描きはじめた。

描かれていたのは、黄色いスコップと、それを持つ二人

の子ども。真ん中には大きな「ごめんね」の文字があった。私は「それ、○○くんに渡してみる？」と聞いた。しばらく黙っていた甥っ子は、小さくうなずいた。

絵を持って登園した日。迎えの時間に門の前で甥っ子が笑顔で走ってきた。

「○○くんがね、絵みて泣いてた。でも、いっしょに砂場しようって言ってくれた」

その手には、新しいスコップがふたつ。どうやら、○○くんのママが同じものを買ってくれていたようだ。

「おそろいだから、絶対に喧嘩しない！」

その言葉と、握りしめたスコップの先にこぼれた笑顔。子どもたちは失っても、またちゃんと取り戻す力を持っている。

黄色いスコップの先端に、仲直りの気持ちさがそっと宿っていた。

その小さな勇気と笑顔こそが、私にとっての「愛顔」だった。

「佳作」

佳き日の暴露

浅田 節子（北海道）

平成九年四月、ホテルで両家の結納を交わした。その会食の席で、家族のこと、お天気、式の日取りについてひととおり話すと会話が途切れてしまった。親同士が顔を合わせるのは初めてで、彼もわたしも緊張で気の利いた話題が思いつかない。全員が口角をあげたまま箸をすすめるだけの時が流れた。

すると「あれは節子がいくつだったか……うちは共働きなものですから、一緒に暮らす私の母、この子の祖母が炊事や子供達の世話をしてくれましてね」と母がおしぼりをさわりながら語りはじめた。

「この子は小さい頃から栗が好きで、ある日に母が栗ご飯を炊いてくれて、夕飯の時にさあ茶碗によそいましょうとお櫃の布巾をめくったら、栗が見当たらないんです。栗だけを節子に食べられてしまっていて」どっと笑いがおこり視線を浴びた。ただただ恥ずかしかったが、わたしも皆と一緒に笑った。

初耳だった。とはいえ何度か布巾の隙間に手を忍ばせ栗

をつまみ食いした記憶はかすかにある。その数は二個か三個か、せいぜいそれくらいだろう。過去いちども家族で語られてこなかったし、きつと場を和ませるために母が大袈裟に盛って話したのだと思った。

後日、このことを五歳離れた姉に話すと、「覚えてる覚えてる。本当に栗は米粒ほどの破片しか残ってなくてさ、せっちゃんお母さんにすっごく叱られてたもん。まだ四歳くらいだったと思うけど、よくあんなにきれいに平らげたよね」と鮮明に記憶していた。なんと母は話をまったく盛っていないかった。

結納の三ヶ月後、わたしたちは結婚式をあげた。義母となった夫の母は、その年の秋のなんでもない日に「栗好きのせっちゃんへ」と大きな栗の絵手紙をくれた。令和になっても、わたしの茶碗に栗を多くのせてくれる。

あのとときの盗み食いエピソードの暴露は、口下手な娘が嫁ぎ先で愛されるようにとの母のメールだったと、いまになつてそう思う。

愛媛新聞 ONLINE **有料サービス**

デジタルプラン

リアルタイム配信で翌朝の新聞より早く記事が読める

高校野球などスポーツ充実

Web限定記事など愛媛新聞ONLINEの全コンテンツが読める

会見・人事異動・自治体選挙など速報の充実

過去3年間分の記事を検索

〔個人会員〕月額プラン

¥1,980
(1~5アカウントの場合)

〔法人会員〕年間プラン

¥21,384



愛媛新聞社編集局「デジタルプラン」係

E-mail media.info@ehime-np.co.jp

TEL 089 (935) 2253 (平日9:00~17:00)



愛媛新聞社

広告

未来へ。
咲く、きずな、
未来へ。

地域に根ざす、
信用金庫として。
手から手へ。
心から心へと。
つなげてゆきたい
想いがあります。



「愛」ある街のホームドクター

愛媛信用金庫

広告

『地域とともに、未来をえがく』

住友金属鉱山株式会社
住友化学株式会社
住友重機工業株式会社
住友共同電力株式会社
住友林業株式会社
三井住友建設株式会社

広告



「ひと・いえ・くるま」の総合保障で
毎日の生活を支えます。

これまでも、これからも、
地域の皆さまの暮らしを支えていくために。
JA共済は、総合保障を通じて
確かな安心をお届けしてまいります。

●終身共済 ●養老生活共済 ●定期生活共済 ●定期生活共済(遺族期間限定型) ●引当額付終身共済 ●医療共済 ●引当額付医療共済
●がん共済 ●特定難病医療共済 ●生活障害共済 ●認知症共済 ●介護共済 ●予定利率変動型年金共済 ●こども共済 ●結婚共済 など
●健康増進共済 ●火災共済 など ●JA共済 ●自動車共済 ●自転車共済 ●健康増進共済 ●健康増進共済

に加入し、お申し込みの際は、JA共済のホームページをご覧ください。詳しくは、JA共済のホームページをご覧ください。

はじめて共済 <https://shiryu.ja-kyosei.or.jp>



くらしの保障、相談するなら JA共済

新ぞう、大地と地域ののらひ。JAグループ

2548100033

「エピソード部門」高校生以下の部

「知事賞」

私とレモンの種

藤村 慧依（愛媛県）

ある夏の日、私は父の好きなレモンを切っていた。じゅるっと溢れる果汁の中につやつやと光る小さな種がなんとなく宝物のように見えた。私は好奇心が湧いた。

「レモンってスーパーで買ったものに入っている種から育てられるのだろうか」

この日から、私とレモンの成長が始まった。

まず、レモンの種の固い部分を手で取り除いたものを湿らせたキッチンペーパーにのせて、芽が出るのを待った。当事小学生だった私は、待つことが苦手で、一日の間に三・四回くらいは確認していたので、芽が出たとき跳んで喜んだのを今でも覚えている。その種を小さな植木鉢で育てた。冬は寒さに弱くて元気がなく、夏は強い日差しで

葉が少し焼けることもあった。大切に育てた葉が虫に食べられて穴だらけになっていてシヨックを受けた日もあった。しかし、その度に調べて対策を考えたおかげで私もレモンも強くなることができた。

小さな植木鉢から大きなものに植え替えるのを繰り返しているうちにレモンの木はみるみる大きくなり、今では私の背と同じくらいまで成長した。私の爪より小さかったあの種が、何年もの時間をかけてこんなに大きくなったのだ。この木の「生きる力」を見てみると、植物にも意志や感情があるのではないかと思ってしまう程の成長っぷりだ。

私は、いつかこの木にレモンの実がなる日を夢見ながらこれからもレモンの木に水をやり、見守り続けようと思う。種から育てたこの木に、続けることの大切さやいのちの強さを教えてもらったから、私も恩返しをする。父にレモンの実をプレゼントするのを楽しみに今日もレモンに水をあげていると、私もレモンの木も自然と笑顔になった。

「私が卒業するのと、あんたが実をつけるの。どっちが先か勝負だよっ！」

「特別賞」

あつたかいごはん

南館 千春（愛媛県）

私が小学一年生のとき両親が離婚した。母と妹は居なくなり、家には私と父と姉の三人になった。そして私達ももう少しで引っ越すと父から告げられ、生まれ育った故郷も、にぎやかで楽しかった家も、やっと仲良くなれた友達も、全て失うことになること知った。

それでも、引っ越すまでの約一ヶ月は普段とあまり変わらない日々だった。朝起きて学校へ行き、友達とお話しして、家に帰ってゲームをして寝る。そんな日常とは裏腹に、私の心だけはどん底へと沈んでいった。幸せそうな友達が憎い。帰っても母と妹はいないし、スーパーのお弁当ばかりで温かいご飯もない。

私は悪い事なんて何もしていないのに、なぜこんなにも苦しい思いをしなければならぬのかと、悲しみが怒りに変わり、その怒り

は父へと向いた。家族を引き離れたのは父だ。私から大切なものを奪ったのは父だ。私と父の距離はどんどんひらいていき、会話をすることはなくなった。

二週間程経ったある日、家に帰るとテーブルの上にカレーと、小さな紙があった。そこには「さびしい思いさせてごめんね」と書かれてあった。帰りが遅くなるからと、一旦家に帰って作ってくれたらしい。お腹も空いてないのに私はすぐに温めて食べた。

正直、味はおいしくなかった。辛いのにりんごの味がするし、にんじんは固いし、じゃがいもはでかくて食べにくい。こんなままずいの食べたことがない。でも料理なんてした事がない不器用な父が私達のために作ってくれたと思うと、涙が止まらなかった。変な味だけれどあったかい気持ちになれた、一生忘れない大好きなカレー。ひとりじゃないと気づけたことで少しずつ世界が色づいていった。

確かに私は幼い頃に多くのものを失った。でも失ったからこそ見えたものもあった。誰かがそっと手を差し伸べてくれる優しさ、不器用でも伝わる想いの強さ。父が愛してくれた私の人生をこの先も大切に生きていきたい。

「優秀賞」

理想の夫婦

安永 有花（愛媛県）

私の両親は特別仲が良いかというところではなく、かといって仲が悪いわけでもない。結婚記念日に何か特別なことをすることはなく、ちょっとした口論をときどきしている。母から父の愚痴をたびたび聞くし、父は母と姉の喧嘩が始まると、加勢することなく一目散に逃げていく。しかし、母の日や父の日には必ず贈り物をお互いに贈っている。土日の買い物や祖父母の農作業の手伝いも、二人でいつも行っている。父は服を買ったら、すぐ母に「これ、かっこええやろ。」と見せている。母も愚痴と同じくらいの頻度で、父の良い所を私に言ってくる。私は、これまで両親がお互いに直接的な言葉で愛を伝えているのを見たことがなかった。初めてその言葉を聞いたのは、今年の母の日である。

私の父は、車で通勤しており、毎朝ラジオを車の中で流しているらしい。母の日の昼ご飯、私も部活が終わって、父母とたこ焼きを食べている時、父の聞いているラジオの話になった。父はいつにも増してニコニコして、自分の投

稿がラジオ番組で読まれたんだと話してくれた。そのアーカイブを三人で聞くことにした。そして父の投稿が読まれた。「ペンネーム、やすばんさん。今週の日曜日は母の日ですね。私の妻は毎日おいしいお弁当を作ってくれます。もうすぐ結婚して三十年になります。日頃、恥ずかしくて面と向かって感謝を伝えられていません。この場を借りて伝えたいと思います。いつもありがとうございます。これからもよろしくおねがいします。」そして、リクエスト曲は、二人が結婚式で使った曲だった。私は、お父さんなかなかやるじゃんと感じた。父と母は私の両親である前に、夫婦だと改めて実感して、娘として少し不思議な気持ちになった。いつも、タメ口で話している両親が、律義に敬語で「これからもよろしくおねがいします。」と照れながら言い合っている姿に、私も自然に笑みがこぼれた。私も結婚したら、こんな夫婦になりたい。

「優秀賞」

細い線

三浦 喜琉（愛媛県）

私はどのような状況でも筆を止めない。昔から絵を描くことは好きだった。線を繋げてやがて形になる。そのような行為が誰のためになるのか、何を生むのかなんて、考えたことはなかった。

「じいちゃん。俺、絵を描く学校に行きたい。」

祖父の家でふと漏らした一言だった。

「絵を描きたいなんて勉強できん言い訳よ。」

思っていたよりずっと冷たい返事が返ってきた。苦笑いする私に、祖母も続ける。

「普通の大学じゃないと応援はしません。」

幼い頃私が描いた絵を二人とも笑顔で受け取ってくれたのだが進路の話となれば、まるで遊びの延長のようにしか見えてくれない。私の絵は、誰の心も動かさないんだと思った。

しばらく経ったある日、父は大量の荷物を車に詰めていた。離婚の話が成立し、別居の準備をしている。私は二人の仲がいいものではないと知っていたので、反対はしなかった。その日、父は私に家族への思いを涙ながらに語っ

た。続けて私の絵の話もしてくれた。これが最後の会話になると思ったのだろうか。

普段は言わないことも丁寧に伝えてくれた。

「絶対に好きなことをしろよ。」

その日の父の言葉だ。私は私の絵を信じてもいい。父の言葉は簡潔ながら優しくかった。

翌日、家に帰ると父はいない。私は今日も筆を止めない。

「絵が完成したら見せてほしい。」

父からのメールだ。私は絵を描くことが好きだ。誰かのために絵を描けるから。線を繋げて、やがて形になる。いつかまた家族がひとつの形になるように。

「優秀賞」

背中を押すよ

弘松 詩菜（愛媛県）

四十九日を過ぎたら天国に行く背中を押してあげないと
いけないよとお坊さんが言っていた。私は怪談話や幽霊は
怖い。でもおじいちゃんの幽霊なら怖くない。そばにいて
困った時や悲しい時は姿を見せて助けてくれたらいいなと
思っちゃう。

お母さんと口喧嘩した時に私に加勢してくれたり、学校
で嫌なことがあった時に変顔で笑わせてくれたり、テスト
でわからない問題が出たときに教えてくれたり、幽霊おじ
いちゃんがそばにしていると大助かりだなと想像したりする。

おじいちゃんは大阪に住んでいたから三か月に一回くら
いしか会いにいけないかった。たまにしか会えなかったけど
会った時はたくさん話した。耳が遠くて話がかみ合わなく
て、それがおもしろくてたくさん一緒に笑った。車いすに
乗って散歩に行つて一緒にボーっと過ごす時間も好きだっ
た。いつもお土産で買っていくベビー母恵夢を「これ、す
ごい美味しいんやで。食べてみ」と言う。私が持つていく
お土産だけなぜか得意げに笑い、美味しいから食べると

毎回勧めてくれる。

そんなとほけたおじいちゃんがそばにいたら毎日私は笑
顔で過ごせるに違いない。

でもね、ずっと私のそばにしていると天国にいけなくておじ
いちゃんがしんどくなるとお坊さんが言う。

寂しくて悲しい。でも笑顔でお仏壇の前で手を合わせる。
私、おじいちゃんの背中を押すよ。天国から見えてね。

元気がでない時には母恵夢を勧めてくるおとほけな笑顔
のおじいちゃんの写真をみることにしよう。

「入選」

父のお弁当

三谷 綺理（愛媛県）

私の体は父の料理で出来ている。高校に入ってから給食がなくなり、毎日弁当を作ってくれたのは父だった。「食事は自分が作るものだからちゃんとせないかん。」と言って頑張ってくれた。前日から献立を考え、冷凍食品も使わず、毎朝台所に立っていた。

三年間、弁当を作ってくれていた中で特に嬉しかったのは、私が好きだと言った料理を覚えていてくれたことだ。ある時、私がエビチリが好きだと言ったらそれから週に一度の頻度で弁当に入れてくれるようになった。また、食欲がない日は白米の量を少なめにと細かく調整してくれていた。それがどれだけ大変かと、実感したのは高校一年生の夏休みだった。

家庭科で自分で弁当を作る課題が出た。夏の台所は暑く、扇風機を回しても少し動くだけで汗が止まらなかつた。火を使えばその分暑さは増していくようだった。前日から炊飯器のタイマーをセットし、おかずの準備をする理由がそのときやっとわかった。料理を作る父の後ろ姿から

は思いもしなかった苦労があった。

毎日弁当を作ってくれていたことがどれほどありがたいことだったのか、自分で作ってみて初めて気がついた。当たり前は当たり前ではない。毎日弁当を作ってくれることに限らず、高校に通えているのもスマートフォンが使えるのも当たり前ではない。これから、当たり前のように支えてくれる父に行動や言葉で感謝を伝えていきたいと思う。

「入選」

愛の手

西森 倅哉（愛媛県）

まだ外はうす暗いのに、台所から米を研ぐ音が聞こえてくる。僕の好きな音。目覚ましより優しく不思議と起きなきやつて思わせてくれる。味噌汁の匂いがしてきて、一日の始まりを感じる。起きる前から、母はいつも何かをしている。弟の制服も父のシャツも相変わらずシワひとつない。僕の弁当もおいしそうだ。卵焼きとか野菜とか、なんで毎日違うのか、母はすごすぎる。でも母は、当たり前前のような顔をしている。これがまたすごい。母の手、細くなくて、昔はキレイだなーって思っていた。でも最近、そこにある小さい火傷のあととか、傷とか、荒れた指先とかに気付いた。こんな手で僕たちの毎日を作ってくれていたことに、ぐっときた。ある晩、寝つけなくて水を飲もうと台所に行ったら、母がまだ起きていた。電気の下でちょっと丸くなって、何か書いていた。たぶん弟の学校関係の書類とか、だろう。顔を見たら、クマもできていて疲れているのが分かる。なのに不思議と横顔がすごく落ち着いていて、なんか泣きそうになった。「もう寝たほうがいいんじゃない？」

「でもない？」という僕。でも母は、微笑みながら言う。「あと少しだけ。明日の準備が終わったら寝るから。」と。母は、僕たちの「明日」を、前日から作ってくれている。誰にも言わないで、当たり前前の顔して。制服。味噌汁の匂い。毎日のお弁当。父のワイシャツ。ぜんぶ、あの手から始まっている。あれはもう祈りそのものだ。誰にも聞こえないけど、僕たちの無事や元気を願っている手。声に出さない優しさって、こんなにもすごいのかって思った。それまで気づかなかった「当たり前前の愛」。胸いっぱい広がり、僕の中で何かが大きく変わっていく。恥ずかしくて素直に言えなかつたけど、今ならはっきり言える。この手のぬくもり、一生忘れられない。僕はきつと、ほんの少しだけ、大人になれた。だから、このぬくもりを、いつか誰かに返せたらいいなと心から思う。

「入選」

オオカミが泣いた日

谷 真乃介（愛媛県）

「明日やろうは、バカ野郎や。やってみたいなと思ったことは、何でも挑戦してみなさい。」

僕たち五人兄弟は、父のこの口癖で育ってきた。五人兄弟と言っても、驚くことにみんな性格が違う。父ちゃん母ちゃんという同じ個体から生まれたのに、全然違うから不思議だ。母ちゃんは、面白いねえ、とよく笑っている。

特に僕の次に生まれた妹と僕は、性格は、真反対。そんな妹が驚くことに、去年、僕と一緒にお芝居のオーディションを受けたと言い出したのだ。妹は、おとなしい。僕と違ってわがままも言わないし感情をあまり出さないから、学校でもいい子で優等生だと先生に言われている。動物占いとやらでは、オオカミらしいがまさしくあたっている。一匹狼という言葉がピッタリ。目立ったことが嫌いだと思っていたから本当に驚いた。オーディションは、歌と台詞。僕はその前の年にも、そのオーディションに参加して合格していたから、ちよっぴり先輩づらをしてみたり。「俺について来い。」

いつもは、しっっかりしている妹が、僕を頼りにして微笑

み返してくれた笑顔は、今でも忘れない。当日のオーディションを僕もやりきり、緊張しながらも、妹もしっかりとやりきっていたことに安堵した。

オーディションは、冬。春になる頃、結果が届いた。僕は、合格の通知を母ちゃんから渡された。だけど、僕の心は晴れない。妹にその通知は、届かなかったから。妹は強いし、クールでしっっかり者だ。きっと大丈夫。僕の左の目にポタポタとしずくが落ちるのが見えた。妹の涙だ。次から次へと落ちてくる涙を僕はただ見ているしかできなかった。

妹は、こう言った。「父ちゃんがいつも言うやろ、やりたいことは何でもやってみなさいって。私落ちたけど、やってよかった。真ちゃんの凄さ分かった。妹でよかった。」俺は、妹にはやっぴりかなわない。

命は一つ。僕らは今日も一生懸命、生きている。

「入選」

伯母からののがき

大場 悠月（愛媛県）

私には、幼稚園児の頃から現在まで、毎年はがきを送り合う「はがき友達」がいる。その正体は、四十も歳の離れた私の伯母に当たる人だ。伯母はいつも、かわいいイラストがついたはがきに、上手な字で、きれいな文章を書いて送ってくれて、それを受けとるのが私のひそかな楽しみだった。

しかし、私が中学生に上がった頃、伯母は脳に障害を患ってしまい、うまく言葉が喋れなくなってしまった。毎年送ってくれるはがきも、段々言葉が少なくなつて、ときには支離滅裂な文章が書かれていることもあった。私は、それを受けとる度、伯母が衰えていくように感じるのが悲しくて、もうはがきのやりとりをやめても良いかと母に相談した。すると母は、送られてきたはがきをじっと見つめ、豪快に笑いながらこう言った。「こんなの、字が読めるだけ上等じゃない。悠月の小さい頃のはがきなんて、ミミズが這っているようにしか見えなくて、おばちゃん本当に苦労していたのよ。」母が見せてくれたスマートフォンには、私が初めて伯母に送ったはがきの写真が映っていた。拙い字で

一面びつしりと埋められ、横には怪物のようなイラストが描かれている。私はそれを見て、数分前の自分がとても恥ずかしくなった。こんなはがきに何年も付き合ってくれた伯母に、私はなんて自分勝手な考えをもってしまったのだろう。会う度に大きくなったねと喜んで、ぎゅっと抱きしめてくれた伯母は、障害を患ってからも弱気になることなく、いつも朗らかで優しいままだ。辛いはずの伯母がめげずに頑張っているのに、私があきらめていいはずがない。

あれから時が経って高校生になった今も、伯母とのはがきのやりとりは続いている。症状はあまり良くならず、意思疎通が難しいこともあるが、私は、伯母の上手な字と、優しくできれいな文章で彩られたはがきが、ずっとずっと大好きだ。

「入選」

消えない記憶

田中 美玖（愛媛県）

「あなた、お名前は？」

病院の面会室で、おばあちゃんにそう言われた。私は、宿題をしていた手を止めた。お母さんがとなりで苦笑いしながら

「あなたの孫でしょう。」

と言った。おばあちゃんはぼかんとした顔をして鶴を折っていた。帰りの車でお母さんは

「忘れた訳ではないよ。必ず残ってるから。」

と私に言ってくれた。

私が小学生のとき、おばあちゃんと一緒に暮らしていた。いつもおばあちゃんは私に、

「これおいしいけん食べやね。」

と言つて色々なものを作ってくれたり、遊んだりとたくさんのおいしい出を思い出した。

数日後、おばあちゃんに会いに行くときまた鶴を折っていた。しばらくとなりで見ていると、私の手を持っていた折り鶴を指差して、

「それ、開いてくれる？」

と言った。羽を開くと、中には文字が書かれていた。おばあちゃんはそれを受け取って、机の上でシワを伸ばした。

「ここにね、毎日大事なことメモしとるんよ。最近は忘れっぽいから、捨ててしまわないよう折り鶴にしとんよ。」

と笑った。おばあちゃんは文字を目で辿って私の名前を読んだ。つぎは私の顔を見ながら名前を呼んだ。

その後、おばあちゃんに手を振って、私は病院を出た。駐車場を歩いていて、振り返ると、おばあちゃんが部屋から笑顔で手を振ってくれていた。窓際には、いくつもの折り鶴が置かれていた。私も笑顔で手を振り返して

「また来るね」

と言い前を向いた。おばあちゃんは私が遠く見えなくなるまで手を振ってくれていた。

広告



みんなの、すぐそばで働くものだから。ひとの肌に、直接ふれるものだから。私たちエリエールは、なによりも「品質」にこだわっています。「どこまで人間にやさしくできるか」を追い求めていきます。ひとりひとりの幸せと、そんな「スキんシップ」を通して、深くかかわっていきます。「やさしく触れていいですか？」この問いに、世界中のすべての人から、力強い「Yes!」をもらえるように。気持ちのために。からだのために。そして地球のために。エリエールの「やさしさへの挑戦」は続きます。



大王製紙株式会社 <https://www.elleair.jp>

広告

この星と人のチカラに。



四国事業所 愛媛県今治市菊間町

太陽石油 SOLA TO

広告

地元、新しいつながりを。



地元の良さってなんでしょう?それはきっと、みんなのつながり。おじいちゃんも、おばあちゃんも、若者も、子育て世代も、みんながちゃんとつながっている。私たちは、スーパーマーケットとしてそのつながりを進化させたい。お買い物だけでなく、お店にふらりと来てほしい。おしゃべりをしたり、一緒に街のことを考えて、新しいドキドキやワクワクを生み出していきたい。モノを買う以上の新しい体験で、みんなをつなげていく。私たちの新しい挑戦に、ご期待ください。

株式会社フジ

〈本社所在地〉〒732-0814 広島県広島市南区段原南1-3-52



広告

愛顔

感動ものがたり



愛媛県は愛顔県

愛顔あふれる感動の

エピソード 写真 映像 大募集!!

愛顔感動ものがたり
公式ホームページでは
過去の全受賞作品を
ご覧いただけます。
作品募集やイベントなど
最新情報も発信しています。



「写真部門」



知事賞

よく頑張った

片岡 美和 (愛媛県)

女性消防団のポンプ操法大会が終えてホッとしている若い女性によく頑張ったと声をかけていました。



河原学園賞

兄と妹

服部 将啓 (愛知県)

ケンカもいっぱいするし、大嫌い！って言うってしまう時もあるけれど、気づけば一緒に遊んで笑い合っているふたり。いろいろなことがあるけれど、ふたりで助け合い、支え合いながら大きくなってほしいと願っています。

優 秀 賞

明るい未来

福泉 安 (愛媛県)

学校行事の田植えで、新任の先生を撮影。最高の笑顔をいただきました。



青春

能瀬 杏音 (愛媛県)

友達との思い出作りに撮った青春の1枚です。

夏ですね

山下 朋恵 (福岡県)

我が家の夏は毎年農道で食べるスイカ。大好きなスイカに自然と笑みが溢れます。



入 選

夏、全開！

西尾 透（鳥根県）

挑戦と笑顔が交差する一瞬、子どもの輝きを水流とともに捉えました。



ママだあ！

土谷 迅斗（愛知県）

はいはいで探索中。大好きなママと目があったよ。



かまくらだ～！

藤川 香那（愛媛県）

今年の初めは南予も雪が積もりました。初めてのかまくらを作るのは大変だったけど、娘の大喜びの顔が見れたので、作って良かったです。

宝物

浦部 綾 (愛媛県)

以前家族皆で菜の花畑に行った時の、まだ家族になったばかりの愛犬を抱っこした娘の写真です。この宝物のような瞬間を記憶に収めたくてシャッターを切りました。



シャッターチャンス☆

中川 想 (大阪府)

生後 8 ヶ月のときの双子姉妹です。2 人同時に笑っているところを撮るのがめちゃくちゃ難しいのですが、この日は大成功。今でも笑顔のかわいい仲よし姉妹です。



知事賞

夏の思い出

中久保 翔哉（愛媛県）
ブランコ楽しい！みんないい笑顔！



河原学園賞

駆け抜ける笑顔

岡部 桜雅（群馬県）

初めてのラグビー体験。最初は少し緊張していた彼女も、ボールを手にした瞬間に笑顔があふれました。この瞬間の輝きを、未来への一歩として残しました。

愛媛広告協会賞



大好きなじいじとおさかなさん

池田 京平(愛媛県)

大好きなひいじいちゃんと大きな水槽の前ではしゃぐ娘。ひいじいちゃんもおさかなもだーいすき！

愛媛県商工会議所連合会賞



いつもありがとう

杉内 佳香(愛媛県)

日頃の感謝でおばあちゃんにケーキをプレゼントしました。

愛媛経済同友会賞



障がいにも負けずに

横江 景太(愛媛県)

足に障がいを持っているけど、前向きに生きているおじちゃんを撮りました。

愛媛県IT推進協会賞



三者三様

石田 彩菜(愛媛県)

部活を終えて歩いている所に、「振り向いて」と声掛けをして撮った1枚。

愛媛県獣医師会賞



柴犬と武将

岡崎 海空 (愛知県)

柴犬と戯れている笑顔な武将の姿を撮影しました。

愛媛県歯科医師会賞



うちらだんご三姉妹!!!

川井 実咲 (神奈川県)

部活の大切な友達。みんながいるからなんでも楽しい!

愛媛県理容生活衛生同業組合賞



カメラが捉えた、笑みの理由

木野下 優花 (長崎県)

今にも聞こえてきそうな叫び顔とその反応にこぼれるニヤケ顔がとてもいいコントラストになっている一枚です。

愛媛県情報サービス産業協議会賞



つくるって楽しい!

黒岩 葵 (鹿児島県)

学校の授業で陶芸をつくっている友人がとても楽しそうにしていたので思わず撮ってしまいました。こっちまで笑顔になりました。

「映像部門」

🎀 グランプリ 🎀

「ごはんのケーキ」 新居浜市立東中学校美術部 (愛媛県)

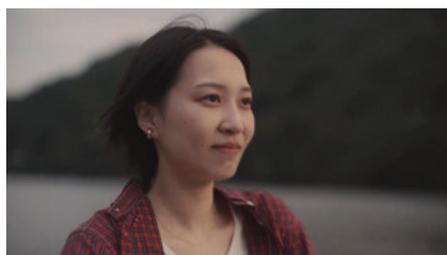
部員全員で原作を読み、各自でイメージカットを描き、いいなと思ったカットを原画にしてアニメーションにしました。原作の「ご飯のケーキ」の親子の温かい絆が伝わるように、優しい雰囲気大切に描きました。難しかったパートもたくさんありましたが、好きなアニメを、動画の研究のためにみんなで鑑賞したり、作業を分担したりして楽しく制作できました。つたないところもありますが楽しんでいただけたら幸いです。



🎀 準グランプリ 🎀

「専属美容師」 鴨頭 圭佑 (愛媛県)

この度は準グランプリをいただき、誠にありがとうございます。姉、両親、祖母に出演してもらい、映画を通じて出会ったプロフェッショナルな仲間と共に、地元・愛媛で撮影を行いました。私にとって「地元」とは何か、そして「映画」とは何かを問い続けながら完成させた一本です。見どころは登場人物全員がそれぞれ愛顔になる瞬間を収めたショットです。ご覧いただいた皆さまの愛顔にも繋がることがあれば、大変嬉しく思います。



🎀 優秀賞 🎀

「いびつな雑巾」 伊予ノ画 長澤 颯斗 (埼玉県)

この度は素晴らしい賞をいただき、大変嬉しく思います。原作を拝読した際、母を失った等身大の筆者の葛藤が感じられました。そして父親がどう向き合っていくのか、今後の行く末を静かな映像として作りました。私にとって愛顔とは、困難を乗り越えお互いの中に信頼と未来への可能性を感じ、安心が溢れたような顔だと思います。最高のメンバーと共にこの作品を作れたことを誇りに思います。ご視聴いただきありがとうございました。



入 選

「ありがとう、こころさん」

Nakajima Film Club
Daizen Britto
(愛媛県)



この度は作品を評価していただき、大変光栄に思います。このコンテストをきっかけに、私たちは「映画を作りたい」という想いを形にできました。また、愛媛に多くの素敵な映像作家さん達がいらっしゃる事が、とても嬉しいです。いつか皆さんと一緒にできる日を楽しみにしています。

「僕らは、支えられていたんだ」

Shu Ichikawa&Yuichi Sato
市川 周
(福岡県)



このたびは入選に選出いただき、誠にありがとうございます。映像を通して伝えられた想いが、少しでも届いていれば幸いです。

「カモメ対メダカの午後」

つばめ組
本田 真貴
(東京都)



賞をいただき大変嬉しいです。原作を読んだ時にこの作品を映像化したいと強く思いました。20代から80代という幅広い年齢構成のチームでこの作品を作れたこと、このコンクールに出会えたことに感謝いたします。

審査委員特別賞

「Memories
- カモメ対メダカの午後 -」

大分大学文化会放送部
三浦 奈己 (大分県)



原作を読んだときに感じた深い喪失感や悲しみと、それでも消えず輝く人の優しさの中で、2人の女性の愛顔や尊い日々の記憶が浮かび上がってくるその感覚を映像にしたいと思い制作しました。レンズに映った彼女らの素敵な愛顔と美しい日々の片鱗が、ふと思い出されるような体験になれば幸いです。拙く至らない点も多い中、審査委員特別賞に選んでいただき、誠にありがとうございます。

「縫い合わせる」

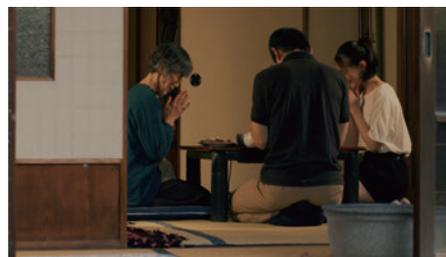
佐藤 望
(愛媛県)



素敵な原作とチームに恵まれて幸せです！監督：三浦彰浩、出演：斉藤かおる・伊澤野杏・濱田由紀子、録音：ヤマウチケンジ・吉田渚生、フードコーディネーター：伊澤牧子、美術：濱田由紀子、企画/脚本：佐藤望

「カモメとメダカとー」

許 文杰
(東京都)



この度は審査委員特別賞をいただき、誠にありがとうございます。本作は、原作のしりとりを着想の起点として、夏の午後というひとつの時空の中で、祖母・父・娘の三世代に起こる出来事を描きました。演出や撮影手法においてもいくつかの試みを重ね、作品全体を伝統的な日本映画の時空に凝縮することを意識しています。本作が、家族の中に重なり合う記憶や感情を、そつと振り返るきっかけとなっていましたら幸いです。

映像部門の受賞作品は愛顔感動ものがたり公式HPからご覧いただけます。





審査委員紹介

エピソード・写真部門



イツセー尾形 (審査委員長)

1952年福岡県生まれ。
1982年より現在まで続く「フツの人の日常を描く」一人芝居を開始。

一方で映画にも出演。

2005年「太陽」(アレクサンドル・ソクーロフ監督)

2016年「沈黙」(スコセッシ監督)

2021年「ONODA」(アルチュール・アラリ監督)

2022年ハロルド・ペンター作「管理人」(演出 小川絵梨子)

2023年ヤスマナ・レザ作「ART」(演出 小川絵梨子)

TVでは「未解決事件警察庁長官狙撃事件」「スカレット」「ワタシたちはガイジンじゃない」「青天を衝け」「どうする家康」「宙わたる教室」など多数。

2021年に「シェイクスピア・カバース」、最新では「人情列車」を刊行。
一貫して人間賛歌を表現し続けている。



神野 紗希 (審査委員)

1983年愛媛県松山市生まれ。

俳人。俳句雑誌「noi」代表。日本経済新聞俳壇選者。

松山東高等学校在学中、俳句甲子園をきっかけに俳句をはじめ

る。歴代最年少で桂信子賞を受賞するなど、若手俳人のリーダー的存在として活躍。「HAIKU LABO」を立ち上げ、

愛媛の観光やものづくりを俳句で発信する。

2019年、「日めくり子規・漱石 俳句でめぐる365日」で第34回愛媛出版文化賞大賞。

近刊に句集『すみれそよぐ』、エッセイ集『アマネクハイク』『もう泣かない電気毛布は裏切らない』ほか。



愛媛県知事
中村 時広
(審査委員)

写真部門審査協力

愛媛県美術会
同 同
日野 義治
大内 清俊
楠本 真人

映像部門



森 幸一郎 (審査委員)

愛媛県松山市生まれ。

映画監督、講師

松山南高校、大阪芸術大学映像学科卒。2009年にヒ

メブタの会(愛媛を舞台にした自主映画の会)を設立。

地域振興・人材育成をテーマに県内を拠点とした作品作

りの傍ら、ワークショップ等を通じて多くのプロ・映画

人を輩出。代表作『食堂ゆすかわ』『赤い橋のある町で』など。「まつやま市民映画事

業」プロデューサー。



杉作J太郎 (審査委員)

愛媛県松山市生まれ。

漫画家、詩人、DJ

漫画家として「ガロ」などで活動。石井輝男監督作品『ゲ

ンセンカン主人』三流さん役で俳優デビュー。2003

年映画制作プロダクションを立ち上げ、映画を制作。2

021年『過杉作J太郎詩集』刊行。「杉作J太郎のフア

ニーナイト」(ラジオ)放送中。



片岡 礼子 (審査委員)

愛媛県松前町生まれ。

俳優

1993年第6回PFFスカラシップ作品『二十才の微

熱』でスクリーンデビュー。

『ハッシュ』にて第45回ブルーリボン賞主演女優賞を受

賞。最近の主な出演作品に『愛がなんだ』、『楽園』、

『Red』、『空白』、『笑いのカイブツ』、『ぶぶ漬けどうです』、『君の顔

では泣けない』などがある。



表彰式イベントゲスト朗読者紹介



紺野 美沙子

1980年、慶応義塾大学在学中にNHK連続テレビ小説「虹を織る」のヒロイン役でデビュー。
1987年、日本アカデミー賞優秀助演女優賞を受賞。
1998年、国連開発計画親善大使の任命を受け、国際協力の分野でも27年に渡り活動した。
2010年秋から「紺野美沙子の朗読座」を主宰。音楽や影絵や映像など、様々なジャンルのアートと朗読を組み合わせたパフォーマンスを全国各地で公演している。
元祖スー女としても知られ横綱審議委員である。



水樹 奈々

愛媛県新居浜市生まれ。
声優・歌手
『NARUTOーナルトー』、『ハートキャッチプリキュア!』、『ダンダダン』など多数のアニメーション作品に出演。
外画の吹き替えやナレーション、ラジオパーソナリティ、ミュージカルの主演等多岐に渡り活躍。
アーティストとしても声優史上初のオリコン首位を獲得、NHK紅白歌合戦に6年連続で出場、東京ドームや阪神甲子園球場などスタジアムクラスの公演も成功させる。
第64回芸術選奨文部科学大臣新人賞大衆芸能部門受賞。



表彰式の模様はYou Tubeにて配信しています。

愛顔感動ものがたり表彰式イベント

検索

で検索

自然と共に、豊かな未来へ



「JA バンクえひめ」は、
えひめの食・農業・人・くらしのつなぎ手として、
自然との調和・共生する地域づくりをめざし、
皆さまの幸せと豊かな未来を支えることを
お約束します。

 **JAバンクえひめ**
(愛媛県内JA / 県信連)

愛^え顔^{がお}感動ものがたり

受賞作品集

令和八年二月発行

発行 愛媛県

観光スポーツ文化部文化局

文化振興課

〒七九〇―八五七〇

愛媛県松山市二番町四丁目四―二

TEL (〇八九) 九四七―五五八二

印刷 株式会社プロックス

エピソード部門の知事賞作品は、愛媛県出身の声優 水樹奈々さんの朗読に合わせたオリジナル映像をYouTubeで公開しています。

令和6年度 一般の部 知事賞
「カモメ対メダカの午後」長濱真理



令和6年度 高校生以下の部 知事賞
「僕の一番の味方」北川晴揮



愛顔感動ものがたり
公式ホームページ

愛顔感動ものがたり
公式Instagram

愛顔感動ものがたり

検索 

